

フリーアナウンサー望月理恵さんとの新春スペシャル対談

壁にぶつかってもくじけない。 挑戦することこそ、次の扉を開くカギです

2026年、新しい年を迎えるにあたり「挑戦」をテーマに、当社代表取締役社長荒賀誠がフリーアナウンサー望月理恵さんをお迎えして対談を実施しました。

「壁にぶつかり、失敗し落ち込むこともあり。でもそれを糧にしてきた」という望月さんのお話から、元気・やる気・勇気をいただきました。

やらないままで終わることを よしとしない!

荒賀誠（当社代表取締役社長、以下荒賀） 日頃からテレビなどで望月さんが明るく元気で活躍されているお姿に元気をもらっています。常に新しいことにチャレンジ、挑戦されている印象があって、私どもの会社も「挑戦」を大事にしておりますので、ぜひ望月さんにお話を伺えればと思います。望月さんはさまざまな番組に関われ、たくさんの方と出会ってこられたわけですが、これまでのキャリアのなかでの、いちばん大きな挑戦をお教えいただけますか。

望月理恵さん（以下望月） やはりテレビの世界へ入ったことがいちばんのチャレンジですね。もともと私は大阪でOLをしていて、ご縁があって当時人気番組だった『世界ふしぎ発見!※1』のレポーター（ミステリーハンター）のオーディションにお声をかけていただきました。それまで私は、大きな目標を立ててということではなく、短大を卒業し就職し、いいお相手と出会って結婚して……と思いながら過ごしていました。あれをやりたい、これがやりたいということをあまり考えていなかったわけです。でも、憧れの番組だし、海外にも行けるということで、悩んだ挙句に思いきってチャレンジ。合格して、あれよあれよという



間に、3か月後にはデビューしていました。

荒賀 やりたいことが見つかった、やりたいことに出会ったということですね。

望月 でも父からは「そんな甘い考えで通用する世界じゃない。よく考えなさい」と反対されましたし、実際、今いったように動機もどこかフワフワしたものでしたから、大きな壁にぶつかりました。とくにアナウンサーの勉強をしていたわけではないので、関西弁のイントネーションを直すのに苦労したり、話すのではなく伝える技術が必要、そもそもカメラの前でうまくしゃべれない。叱られてばかりでした。でも、この壁を乗り越えていくこと、辛いことをよしとしようと決心しました。

荒賀 テレビで拝見しているぶんにはまったくそれを感じませんでしたけれど。

望月 いえいえ、これは今でもそうですね。新しい番組がはじまると、今までのやり方を踏襲していけばいいというものではなく、いろいろな要求が生まれ、そこにやはり新しい壁が立ちはだかる。そして反省する……ということばかり。でも、それを乗り越えていくということの繰り返しです。

荒賀 失敗したとか、うまくいかなかったとかを糧にして、次に活かしていこうと思われることもあるのでしょうか？

望月 その連続ですね。長く仕事をしていますが、完璧にできた、自分が大満足できたということであれば、もうこの仕事を辞めているかもしれません。次はもっとよくしたいと思っているので続いているのかもしれません。

荒賀 挑戦というと何か大きな目標を立ててそれを実現させていくととらえがちですけど、一つひとつ目の前にある課題に励ましの言葉なども得ながら克服していく、それもやはり挑戦ですし、成長につながるわけですね。それではそんな望月さんが、うまくいかなかったときや、壁にぶつかったときにはどんなことをされていますか？

望月 失敗したら私はしっかり落ち込みます。

もちろん人にもよりけりだと思うのですが、私は落ち込むことを糧にしていくタイプでしょうか。先ほど御社の『人生の「ねじ」を巻く77の教え^{※2}』という書籍を拝見したのですが、そこに「できない理由を考える」という項目がありました。

荒賀 なぜできないのか？ ひとりだからできないのか？ 時間がないからできないのか？ まだ技術が追いついていないからできないのか？ それらを分析することで対処法がわかるという教えのところですね。

望月 このことにつながると思うのですが、私は毎日、自分が感じたことを手帳に簡単に記すようにしています。日記をつけるのはなかなか大変なので、2～3行ほどですが、こんなことを感じた、うれしかった、辛かったというように、そのときいちばん自分に響いたもの、心の動きを振り返るようにしてメモに残しています。そのメモを後から見返して、相変わらずこんなことで悩んでいるなんて成長していないなと反省したり、逆に、少しは自分は成長できたのかなという励みにもなったりしますね。

荒賀 面白いですね。感情を言語化されるという



望月理恵（もちづきりえ）さん。1972年2月8日生まれ。フリーアナウンサー。通称はモッチー。1994年、『世界ふしぎ発見!』（TBS）のミステリーハンターのオーディションに合格。1997年までミステリーハンターを担当。2004年から2022年まで『ズームイン!!サタデー』（日本テレビ）の司会を務め、現在は日本テレビ「DayDay.」「ぶらり途中下車の旅」、TBS「THE TIME.」などに出演している。所属は「株式会社セント・フォース」で2021年から同社の取締役にも就任

ことでしょうか。

望月 映画を見たり本を読んだりしたときにも、ただ単によかった、面白かっただけでなく、その感情の大もとがどこから来るのか考えたり、自分の体験と紐づけたりするようにしています。そうすると表現の幅も広がりますし、伝わりやすくなりますね。「初恋の甘酸っぱい感情が湧いてきた」などと自分なりの表現ができるようにもなります。ところで、荒賀社長は失敗については、どんなふうにお考えですか。

荒賀 失敗をポジティブにとらえるようにはしています。新入社員には「会社には評論家はいらない」といっています。「こうすればうまくいきます」とか「これはリスクが大きい」と口にしても、行動が伴わなければ意味がありません。どんどんチャレンジしなさいと。たとえばこのキャラクターは〈ねじっとくん〉というのですが、一般の方々にもっとねじを理解してもらい、親しみにもってもらうためにはどうすればいいかではじめたものですし、この〈受験生応援ゆるみ止めねじ〉もそうですが、アイデアがあればまずはやってみる。実際、この受験生応援ねじについてはそんなことをしても儲からないのにと声もありましたが、この10年で約6万人の受験生にプレゼント、すっかり定着したキャンペーンになっています。

望月 漫画の『エースをねらえ』のお蝶夫人の言葉に「負けることを怖がるのはおよしなさい！たとえ負けても、あたくしはあなたに責任をおしつけたりしない。それより力を出しきらないプレイをすることこそを恐れなさい！」というのがあります。ダブルスを組む主人公の岡ひろみ、いろいろなプレッシャーや周りの中傷にひるむ彼女にかけた言葉ですが、荒賀さんの言葉にそれを思い出しました。

荒賀 やらないままで終わることをよしとしない。チャレンジしたあとの失敗は次の扉を開くカギと考えていきたいです。

「やれること」「得意なこと」で 応えていく喜び

荒賀 漫画のお蝶夫人の言葉が出ましたが、ほかに望月さんがこれまで出会われた方の言葉で印象に残っているものはありますか？

望月 「ジャパンハート^{※3}」の吉岡秀人さんが「自分がやれることをやる。得意なことをやれることに喜びを見出す」といったニュアンスのことをよくおっしゃいます。「ジャパンハート」はひとことでいえば「救えるいのちを救う」活動をしている団体で、海外あるいは国内でのへき地・離島への医療支援、心の医療などを行っており、多くのいのちを無償で救っているNGOです。その設立者が吉岡さんなのですが、なぜ海外なのかという問いに、たまたま海外にいるときに手術をして人を救ったら、そこから多くの人に頼まれてそれに応えているうちにここまでできたと、そして自分がやれること得意なことが手術だからそれを続けているということでした。この「やりたいこと」でなく「やれること」という言葉は目からうろこでした。ほんとうに自分がやりたいことはこれじゃないと自問したり、なにをやりたいかが見つからないなどと模索しがちですが、自分のやれることを一所懸命にやるということも大事ということですね。

荒賀 望月さんはこの「ジャパンハート」の活動



にも参加されておられますね。もともとはテレビでのお仕事がきっかけだったのですか？

望月 「ジャパンハート」にはアドバイザーボードといって広報を担当する人が何人かいるのですが、その一人にどうですかと6年くらい前にお声をかけていただきました。私が「やれること」はイベントで司会をすることなどですが、やれることがあるというのはやはりうれしいですね。

荒賀 「やりたいこと」と「好きなこと」が一致することもあればそうでないこともありますね。会社ならなおのことで、ときには自分にとっては不本意な人事があったり、役回りであったりすることもあります。「でもあなたならできる」「君にやってほしい」という期待に応えることが、案外、自分の新しい面を発見することにつながったり、成長につながったりするわけです。「やれること」をしっかりとやっているうちに「好き」につながってもいいと思いますね。

共感することを 忘れない

荒賀 望月さんはフリーアナウンサーとしてだけでなく、「セント・フォース^{※4}」という会社の取締役でもいらっしゃいますね。また、たくさんアナウンサーやタレント職の皆さんの上司という立場でもいらっしゃいます。後輩や部下の皆さんと接する際に心がけていることはありますか？

望月 2021年に「セント・フォース」ではじめて女性取締役に就任しました。私はマネジメントに携わるというよりは若い人たち（後輩たち）の相談に乗っているという感じです。現場を知っている役員も少ないので、相談事に対して「わかる、わかる、私も経験してきた」と共感したり、「悩んでいるということは努力していることの裏返し」と励ましたりしています。

荒賀 フリーアナウンサーやレポーターなど競争が激しい世界だと思うのですが、何が大事なので

しょうか。スキルでしょうか。

望月 スキルをもっていることは前提ですが、それプラスαが求められます。ただ個人だけではなく、私は自分の味方を見つけることも大事だと思います。一般の会社でもそうだと思いますが、結局、仕事はひとりだけでは成り立ちません。スキルをもっていても誰にも認めてもらえなかったら意味がありません。番組制作などはチーム力が必要だと思っているので、自分を活かしてくれる、誰かを活かしてあげられる関係性をもつことが大切なのではと思っています。そして、やはり「セント・フォース」という会社をより向上させていきたいという思いが大事です。先ほど「ジャパンハート」の話をしましたが、私が役員をするようになってこういった社会貢献活動にも会社として参画するようになりました。クリスマスには「サンタクロース」と「セント・フォース」を組み合わせて「サンタフォース」という名前でクリスマスイベントを実施。「セント・フォース」の所属アナウンサーが“サンタフォース”に扮し、集まった応援資金で日本の小児がんと向き合う子どもと家族をサポートする活動「スマイルスマイルプロジェクト」に寄付するチャリティ企画です。もともと個人で活動していたのですが、会社単位だとよりスケールアップできますし、また若い人たちも、これまで関心があったけれどどうすればいいかわからなかったから、活動に参加できてよかったととても喜んでくれています。



荒賀 私どもには「我らの信条」といって会社の経営理念をまとめたものがあるのですが、そのなかでも「我らは社会に貢献する」と大きくうたっています。これは創業以来不変のものです。そして今年は「日本でいちばん大切にしたい会社」大賞の地方創生大臣賞も受賞しています。

望月 今日お目にかかってそうしたベースがあるから、ずっと成長し、また挑戦を続けられている企業なのだと思います。

荒賀 ありがとうございます。最後になりますが、私どもはこれまでの中期経営計画を終了し、これから新しい3年間の中期経営計画がはじまります。日東精工の従業員に対して励ましのメッセージをいただけますでしょうか？



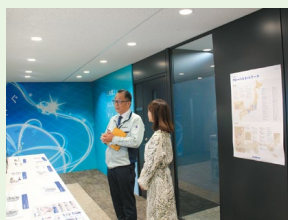
望月 会社が新しいステージに入るということは、じつは個人、一人ひとりも新しいことを迎えるということですね。本日のテーマ通り「挑戦」を心に刻みながら、仕事もプライベートも充実したものにしていっていただければと思います。

- ※1 「世界ふしぎ発見！」世界各地の歴史、風土、文化などの不思議、謎、ミステリーについて、現地取材のレポートをスタジオで総合司会者と解答者がクイズやトーク形式で紹介する番組。1986年より放送開始され、38年に渡って放送が続いた長寿番組である。
- ※2 『人生の「ねじ」を巻く77の教え』当社の人材教育を一般向けにまとめた書籍。2014年ポプラ社刊
- ※3 ジャパンハート 2004年に小児外科医の吉岡秀人さんが生まれた国の違いで失われていく命を救うために設立した日本発祥の国際医療NGO。東南アジアを中心とする国内外で、小児がんや難病などの高度医療が必要な疾患を含め年間約40,000件の治療を無償で実施しており、団体設立以来の治療件数は40万件を超えている
- ※4 株式会社セント・フォース 東京都渋谷区恵比寿に本社をおく、タレント、フリーアナウンサー、キャスター、リポーターなどが所属する芸能事務所

閑話休題

今回の対談は、昨年9月号で掲載した長瀬次英さん（Instagram 初代日本事業代表）と荒賀の対談がご縁で実現したもの。その対談終わりのざっくばらんの席で長瀬さんが友人である望月さんに「今、あやべにいます」とラインを送ったところ、「あやべってどこ？」「京都！」といったやりとりなどがあったことをきっかけに、まずは東日本支店にご来社いただいてということになりました。ショールームをご見学いただいたあと、対談前には当社東日本支店で産機製品を販売担当する北口大貴

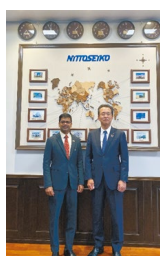
がお茶を点てご接待。当社が京都に本社をもつ企業であるということもアピールさせていただきました。最後は東日本支店の従業員も集合しての記念撮影。やさしく気さくなお人柄に皆、感激しました。望月さんは兵庫県明石市ご出身で、先日もご実家のご両親と天橋立へ旅行をしたと伺いました。あやべ郊外の人気のお店にも誘われたこともあるそうで、ぜひ、今度はあやべの本社にもお越しいただければと思っています。



インド総領事が当社を来訪。工場視察と関係強化に向けた協議が実現

当社では成長戦略のもと海外展開にも注力しています。成長が著しいインドもそのうちのひとつ、2025年春には、現地でも自動自動車産業に強みを発揮している冷間圧造メーカーのバルカングループをM&Aで子会社化しています。

11月26日に大阪・神戸インド総領事チャンドル・アップル氏を本社にお迎えし、当社八田工場を視察いただきました。またインドと当社の関係強化・発展に向けての協議も実施。総領事からは「両地域のさらなる発展に向けてサポートは惜しまない」と、心強いお言葉をいただきました。



工場視察では当社ファスナー事業本部技術部 技術課員・インド出身マリアパン・サティシュ・クマールが同業内

当社代表取締役社長が「あやべ市民大学」でゲスト講師

当社が本社をおく綾部市では市民向けに地域の歴史や各種事業、魅力的な人などさまざまなテーマで各自が教養を深めていく「あやべ市民大学」を開催しています。昨年の12月7日に本年度9回目の講座が開催され、当社代表取締役社長荒賀誠が『人を大切にする経営』のあり方という演題で、当社が今年「日本でいちばん大切にしたい会社」大賞の地方創生大臣賞を受賞したことなどを例にとりながら、あやべに本社をおく当社の経営理念や事業活動をお話しました。当社ではこういった「場」を大切にこれからも日東精工の魅力を発信していきたいと考えています。



投資家の方向けにさまざまな情報を提供しています

当社では証券会社と連携しながら、当社のことをより深く理解しご支援の幅を広げていただくためにIR情報を定期的に発信。2025年11月13日には「第3四半期決算報告」を発表しています。また個人株主様を対象に工場見学会も随時実施。11月14日には鎌倉投信、12月11日に西村証券のホームページで日東精工工場見学会の模様をご紹介します。

さらに、今般、株主の皆様への感謝の意を表すとともに、当社株式の投資対象としての魅力を高め、より多くの投資家の皆様に中長期的に当社株式を保有していただくことを目的として、株主優待制度を新設しました。綾部市（京都府）の特産品等を選択肢としてご提供することで、当社創業の地「綾部市」の魅力発信につなげてまいります。



▶株主優待制度についての詳細についてはこちらをご参照

当社ねじ締めロボット(ねじロボ®)が「JET-Robotics」に掲載されました

「JET-Robotics」は東京銀座に本社をおきアメリカとベトナムに支社をもつ株式会社EXIDEAが運営するロボット導入のための支援ポータルです。このサイトでねじ締めロボットの特集があり、製品の特徴や活用例、選び方などが紹介されています。

特集内ではおすすめのメーカーとして、日東精工がトップで取り上げられ、当社製品NITOMAN®SR580Yθ Z NITOMAN® SR395 DT NITOMAN®SR580Fが掲載されています。当社はねじ締めロボットを世界ではじめて開発し、半世紀の歴史をもっていますが、今後もさまざまなニーズにお応えし、常にお客様満足度120%を目指します。



「JET-Robotics」での特集 下はNITOMAN® SR580Y θ-Z

日東精工グループはさまざまな形で表彰を受けています

日東精工グループの日東公進㈱は『第12回きょうと健康づくり実践企業』において、最優秀賞を受賞。2025年11月26日、京都府主催の「ヘルス博KYOTO 2025」にて、表彰式が開催され、同社代表取締役社長小雲康弘が出席。西脇京都府知事より最優秀賞の賞状を、きょうと健康大使の木村祐一氏（吉本興業所属）より記念品の盾を贈呈されました。

また11月13日には令和7年度近畿地方発明表彰が行われ、当社ファスナー事業本部製造部特品課特品R係係長の堀田真司と当社のファスナー事業本部に勤務していた横田正典が「ウォームギヤのウォーム部品（特許第7185424号）」で発明奨励賞を受賞しました。

日々の活動の延長線上に表彰があり、賞を得るために活動があるわけではありませんが、外部から評価をいただくことは、やはり自信にもなり、励みにも誇りにもなります。表彰されたことはそれだけ責任を負うということと心得、

これからも精進してまいります。



左上の画像が健康づくり実践企業の最優秀賞の表彰式。中央の小雲を挟んで左が木村氏、右が京都府西脇知事。右が近畿発明表彰を受けた堀田真司

サンテレビで日東精工をご紹介いただきました

神戸に本社をおくサンテレビではこれまで何度も当社を取材いただき、「トップの言魂」での当社会長や社長のインタビューはYouTubeでも見られるようになっていました。そして、昨年12月にも新たな番組取材を受けました。THE LEADERS〜未来を創るモノづくり企業〜という「技術」に焦点を当てた番組です。

本社応接室にて当社代表取締役社長荒賀誠をインタビューいただき、ミーティングルームでは技術部門の担当役員として桐村和也がゆるみ止めねじ「アプスロック®」を解説。その後、八田工場へ移動し、設計事務所やねじの性能試験の様子などを撮影いただきました。毎週月曜21時27分から放映される番組で、当社に関しては1月12日放映です。



ねじ大好き！

コラム

受験生応援ゆるみ止めねじプレゼントキャンペーン 第1回受付として3250個贈呈！

当社が2014年からはじめて「受験生応援ゆるみ止めねじプレゼントキャンペーン」。「もはや冬の風物詩」としてメディアなどでも取り上げられることも多くなり、たとえば地元のコミュニティラジオ「FMいかる」では、「いかる街角ニュース」として、組立工程の説明と実際の組み立ての様子などの取材を受けました。当社担当者



から受験生への応援メッセージとともに、キャンペーン開始の事前告知や当日告知として何度かご紹介いただきました。

個人（毎回先着100名）だけでなく、学校やクラ

ス・グループ単位、あるいは学習塾などからのご要望にもお応えするようしており、昨年12月に締めきった分としては3250個を既に発送を終えていて、喜びの声も届きはじめています。最終の第3回の受付は2月5日から予定していますので、学校受験だけでなく、資格試験などを控える方やなにか新しいことをはじめようとする方などは、ぜひご応募ください。



▶キャンペーンの詳細はこちら

松無古今色

代表取締役社長 荒賀 誠

あ やべ不世出の画家・有道佐一の作品を展示する「自適館」

に「松無古今色」という額が掛かっていました。松の緑は時が経ても変化することがない、禅語としては有名な言葉で、お茶席などで短冊や軸が飾られることも多いようです。

一見変化がないように見える松の葉ですが、松は時期がくれば古い葉を落とし、新たな葉を生み、その葉が成長していき、この繰り返しによって緑が保たれています。神社の常若（神様は常に生まれ変わり新たな力を得る）にも通じるものです。

そして、松は人が丹精こめて手入れをするから、立派な姿を見せてくれるのです。人が住んでいない、手

入れられないお家の庭は荒れ放題で、松も、ただそこに立っているだけの残念な姿になっています。しかしたとえば、足立美術館の日本庭園などの松は世界中からその姿を鑑賞するためにたくさんの方が訪れ、その立派さに感動するのですが、それは、専門の庭師さんが毎日、面倒をみているから成り立っているのです。

不変は絶え間ない小さな変化の上に成り立つと同時に、そこに一人ひとりの目くばり、心くばり、努力の賜物ともいえます。この不変は、ビジネスの場では成功・発展、繁栄という言葉に置き換えてもよいかもしれません。当社、日東精工も「松無古今色」を大事にしています。

※「松無古今色」（まつにここんのいろなし）いつの世でも変わらないもの。不変、普遍。古い世代もこれからの世代も大事にしていく。

「幸せ」を見つけるヒント 1月

足元に「ミラクル」がある

当社が本社をおく京都あやべの郊外、君尾山には四国八十八カ所めぐりと同じご利益が得られるという写し霊場があり、光明寺の二王門そばに88体、古井と山内の参道入口にそれぞれ44体、合計176体の石仏が寄進されたという記録が残っています。しか



し最近の調査で山内では36体の石仏しか確認できませんでした。残り8体は土砂崩れの影響などで地中に埋もれているのだ

うと推測され、それで石仏レスキュープロジェクトと銘打って、地元中学生も参加して発掘調査が行われました。重機も使わずに限られた時間、限られた人数で3体を発見。残り5体はまだ埋まっているのかもしれませんが、それでもとても「ミラクル」なことが起こったのだと思います。

中学生が地域の大切なものに目を向ける、その価値を見直すきっかけになったのが、いちばんの収穫でした。アンテナを巡らせ視野を広げることもちろん大事ですが、同時に自分の足元をしっかり見つめることも大事。身近なところに「ミラクル」の材料はじつはたくさんあるのです。

日東精工代表取締役会長 材木正己
綾部商工会議所会頭

